あさ 9

2014

舎人公園

遠きミャンマー

簟のながき參道金の塔

佐藤喜孝

あを

九　月

めうがの子

佐藤喜孝
東京

夜夜中影を探して熱帶魚

退屈になる熱帶魚よりさきに

ジーパンのうつあしを干す夏の海

疊に手ついて支へる盆の月

歩かねばならぬ時なり鳳蝶

裏山をころげ落ちたるめうがの子

ことしまた八月十五日らしく晴

算術に齟齬のありけむ夜長かな　尚子

シクラメン内助の功の幾年月

年年を心盡して冬紅葉

この三句は私が「獐」を退いたとき、芝尚子さんからのお手紙に同封されてゐた。獐最後の編集後記に

母瑠河夜長高島茂算術す　喜孝

を挿句した。この句は『靑寫眞』に入れるつもりであったが茂さんが没にされた。わたしは茂さんが好きだし、この句も好き。三句とも経緯もご存じの尚子さんの励ましの句である。第二句集『母瑠河』はまことに少部数作った。見返しは茂さんに頂いてあった特徴のあるボルガの計算書を使用。茂さんの膝下にあった獐に発表した句でまとめた。表紙は説明しなければ分らない写真。茂さんがマイクを持ってブラウン管に流れるカラオケの文字を見ながら唄ってゐる後ろ姿。場所は中野坂上、今は山手通りとなった。

尚子さんには借りを作ったままである。

☆

早崎泰江
埼玉

漱石の「こころ」再読梅雨ふかし

遠雷や散歩の犬の思案顔

炎天をものかは蝶の戯むるる

生きること今必死なり油蝉

歩かねば老いるばかりぞ夏帽子

竹の花

森　理和
東京

重さうに大屋根を越す鳳蝶
ひつそりと予期せぬ出合ひ竹の花
庭先にサーフボードを入道雲
葦揺るる飛び立ち蜻蛉一巡り
蜻蛉生る育ちし水辺後にせり
青蜜柑駅員さんと顔馴染
築城の石切場なし夏椿

☆

山荘慶子
埼玉

迷ひ犬彼是言ひて夏夕べ

此の年も卒寿の人の夏便り

凌霄花庭から元気溢れをり

日盛やニコライ堂傍病院へ

友からの便り途絶えし夏椿

戸の隙間盆灯籠のちらり見ゆ

看板に隠れ家とあり竹落葉

☆

吉弘恭子
東京

団子虫鉢の底からぬすみ出る

ありんこにのぼられ胸の高なりぬ

夜の明けて団子のやうにアリマキ死す

歩く影大きくなりて燕のむ

水輪から水輪へ尾鰭梅雨さかり

蝶々は天空が好き番また

八月や輪ゴムで打ちしカレンダー

九月号の原稿をパソコンに打ち込んでいたら、石動さんの句に懐かしい名前を見つけた。

記憶があやふやになってしまったが、父と私は毎晩十時になるとラジオから流れる浪曲に聞き入っていた。その日が虎造の時は聞き惚れるということがぴったりにラジオのそばで何もしないで聞き入ったものだ。声がいい、間がいい語り口も。

へ旅行けば駿河の国に茶の香り……！馬鹿は死ななきゃ〜〜〜治らないと。

テレビを買えなかったのか、もしれないがあの頃は楽しかった。中学生だったと思う？

又先日亡くなってしまった村田英雄の歌入り浪曲もたまらなくすきだった。今テレビでもラジオからもとんとご無沙汰。急に思い出し嬉しくなって聞きたくなった。パソコンで調べてみよう。

夏帽子

赤座典子
東京

梅雨寒や翠玉白菜仰ぎ見る

梅雨曇子鼠の尾の一文字

響き愛し南部風鈴二十年

一瞬に白雨の隠すほくほく線

流川さびれし簗に鯉のをり

見廻りの猫と目の合ふ朝曇

夏帽子少女のやうなお母さん

五月に亡くなった母の本棚に父の成績表を見つけた。父は中学卒業まで中国の青島で暮らしていた。その地の坊子小学校の六年間、青島日本中学校の五年間の通知表では　甲の評価が殆どであるが、修身、唱歌、操行は　乙が多い。

これを見て、母から聞いた話を突然思い出した。女学校での修身の授業が嫌いでその時間だけ欠席し、次の授業に何食わぬ顔をして戻っていたという。父母の新たな共通点を発見出来愉快であった。

父が出征するまでは映画にもよく一緒に出かけたそうである。

もし無事に復員していたら、いえ戦争がなかったら　二人は末永く一緒に暮らしたであろう。そして父は唄うこともきっとうまくなっていたであろう。母はとても唄が上手だったのだから。

☆

井上石動
山梨

ラジオから仏蘭西恋歌さくらんぼ
しなやかに香魚は網へ飛び込めり
虎造の節の憎さよハンモック
甚平がテレビと会話また始む
自転車を乗って腰浮く暑さかな
魂まつり足ふんばれよ茄子胡瓜
糠漬の茄子紺の此の深きかな

このいのちなにをあくせく

妻の知人に「宙先案内人」なる人あり。北大・名大でオーロラ研究、はては、オーロラと星野道夫さんに会いに、現地へ行ってしまった女性。山梨県立科学館に関与し、現在は独自の活動をしている30代（既婚）。

昨年の冬至日、甲斐駒ヶ岳への没日堪能、その夜、彼女の工房にて心温まる料理、酒、宇宙探訪の映写、星売観察。3～4秒もの流れ星に遭遇、参集者すべからく感動。

その「宇宙探訪」のCGを眺めつつ（ナレーションは彼女、BGMは生ギター）思った。身ほとり世界には「果て」必ずあるも、宇宙に「果てなし」。どこまでもどこまでも、まさに「寿限無」の「限り無し」。さらに大宇宙の中での「太陽系」など、ほんの塵。さらにその塵の中の一つが、我らが「水の」地球。それ故にこそ、この「奇跡の地球」を大切にせにゃあ。そして、そんな塵の、亦さらに塵の中に住み、日々世事に労する我とは何ぞやと。

結論としては、あくせくしつつも、ゆったりと生くべし、程度でお茶を濁す。

凡人、哲学者には成れず…というオチで。

あめんぼう

大日向幸江
埼玉

あめんぼう沼に小さなゑくぼ出来
蓮の花これからパッチリ咲くところ
少年の心波立つ鬼ヤンマ
蓮池の黒子のやうなかいつぶり
積乱雲崩れのこりし雨柱
空玉を揚げて花火の始まるや
どの影も地を這ってをり大炎暑

☆

雨音の遠くより来たり梅雨の夜

軽鳧の子の揃って何度も飛ぶ稽古

干物啣へ猫ゆうゆうと炎暑道

目覚むれば梔子の香の部屋に満ち

朝毎に梔子の白活けにけり

年来の友にばつたりかき氷

母ひとり如何な日過ごす籐の椅子

斉藤　裕子
東京

七月十七日、里帰りした。手術、抗癌剤治療を終え、元気になった顔を母に見せる為に、一年振りの鹿児島行きだった。暑い中、体調を案じながらの長旅だった。

一年という時間は、高齢の母に大きな変化を齎していた。幸いな事に母は娘の大病も、然程大変だったとは想像していなかったようだ。三十センチもの手術の傷跡を見て初めて、大変な手術をしたんだねと驚いていた。

自分の日常生活を熟す事で精一杯になってきたんだと察せられた。

母のペースを乱さないように気遣いながら、母のできなくなった部分の事をやってあげようと、目一杯働いてきた。動けた事で、体力に自信も取り戻せて、私にとっても良い里帰りになった。

☆

秋彼岸本家分家の向き違へ

一斉に鳴き出してゐる夕立晴

原発事故を薄めてはだめ鰯雲

佃から八丁堀へ虹の橋

夏休あしたは孫の来るといふ

夕立来ると鴉ひと鳴き森鎮もる

撹乱の腹を固める薄き粥

篠田　純子
東京

竹本住太夫の引退公演、文楽夜の部「女殺油地獄」を見に行った。

人形遣いの簑助は女の頭を巧みに遣い、三味線の鶴澤清二の糸の音は、たとえようのない味を醸していた。

ドナルドキーンさんは「日本人の関心の無い文楽」と言うが、この日は大入満員だった。

何日かして、無性に三味線を弾きたくなった。十六歳から三十一歳まで長唄の稽古で馴染んだ音色だ。同じ流派の先生を探しだし、体験の稽古に行って見た。先生は五十代の女性でユーチュブやニコニコ動画にも登場している。稽古する仲間は五名で一人は男性だ。入会し三ヶ月は頑張ってみようと思っている。いつかやろうなんて時間は残っていない。

三味線の兵隊稽古日雷

炎　暑

定梶じよう
石川

でででむしの子にし右巻殻のうづ

漆黒へ蛾が落つグランドピアノかな

光陰が迅く過ぐ氷菓舐めをれば

蚊ばしらの弾むやうなり海軟風

軒風鈴二つ違うた音で鳴る

路地裏にひっそり質屋日の盛り

喪服吾れ炎暑影なき塀に沿ふ

かつてある句会で、席題「朝寝」が出たことがある。選評後異口同音にいったことは、この題は難しい、ということだった。確かにそうで、できた句は、なぜ朝寝をしたか、という説明になりさがってしまうのだ。

私が秀品と思う句を書き止めてある帳面にも

朝寝すや旅の雨垂れ襖なす　長島杜康

があるのみだ。

しかし近年立て続けに次の二句を得た。

エジプトの女王のごとく朝寝せる　竹内弘子

耳遠くなりたる分を朝寝せり　中川句寿夫

弘子さん句、女王が朝寝するものか否か知らぬが、この飛躍が愉しい。

八十八歳の句寿夫さん句は現実をす早く季語でいい止めて、いずれも優れた句だ。

七　月

須賀敏子
埼玉

梅雨ごもりセロリの筋を長く引く

岩を抱き足場探せり雪割草

新しき浴衣扱けば指あをし

寄る辺なき猫の声あり夕端居

道の駅かぼちゃの様なズッキーニ

飛魚を見れば八丈島（はちじょう）近づきぬ

八月に向けて一羽の鶴を折る

木下闇

田中藤穂
東京

新盆の佛間灯りて家しづか

祖霊座し昔を語れ盆の月

朝の客朝顔市の鉢提げて

折返し地点風あり花ダチュラ

右手足不調を梅雨のせいにする

駅暑し子規庵示す案内図

配達夫木下闇を褒めてゆく

芝尚子さんが九十二歳の御高齢で亡くなられた。しみじみと淋しい。

雛の節句の時に大山夏子さんと二人招いて戴きお宅へ伺った事がある。

尚子さんはお茶の先生、素敵な塗皿に和菓子をのせて「ひきちぎりよ。」と出して下さった。楊枝がついてないので手でひきちぎって頂くのかなと見ていたら「あらお楊枝わすれた。」と黒文字の菓子楊枝を出して下さった。万事びしっとしていらっしゃるようで時たまこういう愉快なところもあった。「何処へ行っても私が最高齢」と仰しゃっていたが、今度は私がそうなってしまった。

日本橋生まれの生粋の江戸っ子がこの世から一人減ってしまったのが残念です。いろんな事をよく知っていらっしゃったのに。祈御冥福

雨

長崎桂子
三重

薄明り帰り来たるらし夕蛍

手毬花少女はゴールに向ひ蹴る

雨あがり闊歩の少女さくらんぼ

御八つ時団扇の風を良しとして

しとしとの梅雨なつかしやゲリラ雨

自然界日毎に変化蝉の鳴く

照り降りの落着きたりしか梅雨の月

六月中頃過ぎからは梅雨と言へど雨は降らず、真夏日の連続に暑さに慣れていない身体は体調を崩し発熱までしてしまった。

久し振りに見た庭は青々として、「まあ草の伸びるのは早いわね、どうしてこんなに良く育ったの」と思わず独り言が出た。

そして七月に入り早々と台風がやって来た。激しい気象の変化には、全くお手上げ状態です。

とにかく体調と時間を見計らって日々少しだけでも、草むしりを進めて行かなくてはと思う此の頃です。

あをキーワード俳句辞典（くきーくさ）

釘

釘打つてまごの手懸けてクリスマス　定梶じょう
船釘が船板塀にあたたかし　定梶じょう
秋霖や釘打つ音に靴屋さん　森　理和
うす明り釘打付けて山眠る　長崎　桂子
梅雨あがる白太に釘の跡ふたつ　吉弘　恭子

区切

坪畑一線区切る芽桜　関口　ゆき

括る

括られし毛蟹が哭けり雪もよい　後藤　志づ
括られし桑富士山を遠景に　栢森　定男
颱風くる確と括りし家まはり　長崎　桂子
菜の花や荷台に釣果括りゆく　森　理和
花の雨かんじん縒で指括る　篠田　純子
冬菊の黄を残すまま括られし　鎌倉喜久恵
細引に括りし枯枝芽吹きそむ　竹内　弘子

潜る

大門を潜り行列花の下　森山のりこ
倒木を乗り越え潜り秋に染む　森　理和
江戸の火事いくたび潜り二天門　森　理和
山門を思はず潜る冬桜　田中　藤穂
水潜る一人遊びを鳰　芝宮須磨子
土手焼の煙潜りて橋わたる　早崎　泰江
にぎやかに雀の潜る蕎麦の花　定梶じょう
潜り来て干す鵜の羽根が重たさう　東　亜　未
一瞬と永遠潜る花吹雪　篠田　純子
茅の輪潜るただただ祈ることのあり　須賀　敏子
大いなる茅の輪潜りて鹿島宮

苦言

苦言してほほゑみし人走馬燈　芝宮須磨子

草色

草色の男になつて水夕べ　佐藤　喜孝

草木

利根川の草木は枯れて布団見ゆ　江倉　京子
ばった去り草木も色の移りけり　吉成美代子

雨の日の開いてゐる窓のうぜん花　佐藤喜孝

夕虹や鈴鹿山脈近付ける　長崎桂子

大窓を緑が蔽ふパン工房　森　理和

向日葵の蕾の中や小虫住む　山荘慶子

掘り起こす土の湿りて春の風　吉成美代子

てのひらに春蚊をいれる少しかたい　吉弘恭子

古民家や島の栄螺のスパゲティー　赤座典子

花栗や間なしの雨の熄みたるらし　井上石動

ソーダー水おしゃべりな泡立ててをり　大日向幸江

散る花を葉にとどめをり京鹿子　斉藤裕子

眞夏日や甲州辯が朝ドラに　芝宮須磨子

三味線の兵隊稽古日雷　篠田純子

按ずるに父は入りむこ麦こがし　定梶じょう

松蝉が爆発的に鳴き始め　須賀敏子

電車よりニコライ堂見え青葉見え　田中藤穂

喜孝　抄

八月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

父の日の口を開きてすぐ閉じて　佐藤喜孝

父親たる者は、やたらと喋らないものだと思っていた。大概は、腕組みしたり懐手したりしていて、たまに声を発する時は「ほほう」とか、「どうでもいい」とか会話は短い。この句の「父」は発し掛けたが声も発しない。

この句の「父」は沈黙が、何より素晴らしい結果をもたらすことを、修得されている超一級の「父」と拝察した。（純子）

夕虹や鈴鹿山脈近付ける　長崎桂子

見慣れてゐる鈴鹿山脈に大きな虹が懸った。虹が懸ったからか、雨後の清澄な大気故か。いつも見慣れてゐるのとどこか違ふ。鋭い感性と簡明な表現で大景を捉へた。

今夏、作者の住む四日市は八月の末に豪雨特別警報がでた。電話で確かめたら無事とのことほっとした。いつ・どこで・どのやうな災害に遭遇するか分らぬ時代になった。（喜孝）

花屋みな軒をはみ出す四月かな　吉成美代子

花の好きな作者にとって、四月は待ち焦がれた時なのでしょう。お客様が目移りするように、何度でも立寄らせるようにとレイアウトされた花屋さんの店先は「あらあらこんな所まで」と思う程大胆に草花が、道にまではみ出しています。作者のウキウキした表情生き生きとした目の動きの見えるようです。（純子）

てのひらに春蚊をいれる少しかたい　吉弘恭子

作者は優しく蚊を捕えた。手の中の春の蚊をかたいと感じた。その感性に驚く。刺されると痒い。イコール憎らしい。と言う感情ではない。生ているものを愛おしんでいる。（純子）

花栗や間なしの雨の熄みたるらし　井上石動

静謐な句。

上五は「栗の花」で済ませてもよいのだが、表現が弱いと思はれたのだらうか、「花栗や」と据ゑた。雨は激しく降るでもなく止むでもなく降りつづく。しかしふと気がついてみると外の気配が違ふ。雨が止んだやうだ。淡々と叙して、空間の広さ、大気の匂、そしてしづ心を表現した。（喜孝）

三味線の兵隊稽古日雷　篠田純子

「兵隊稽古」を調べたが分らなかった。分らないが言葉の雰囲気はよく分る。複数の三味線弾きが号令とともに1、2、3と稽古をしてゐるのだらう。祭の準備のやうでもある。三味線の音が屋外にゐても聞えてくる。そんな町のやうすが「日雷」で的確に表現してゐる。（喜孝）

白椿そのまま落ちて清楚なり　芝宮須磨子

白椿が、落ちる瞬間を見られたのでしょうか。偶然の驚きと咲いていたまま崩れぬ白椿は土の暗さの上でなお光を放ち、清楚な様子に作者は目を離す事ができないのです。（純子）

按ずるに父は入りむこ麦こがし　定梶じょう

出だしの「按ずるに」ですっと作者のひとり

語りがはじまる。父のこと、母のことなどをあれこれ思ひ出し、考へてゐる。ああ、あのことも、もしかしたらあのことも、父が入婿であったが故ではなかったのかなあ、とおもひつつ、麦こがしでお茶などを喫してゐる。按ずるにの語り出しに引込まれ、ついついわたしも話を聞込んでしまった。

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2014年10月号

特集 日本全国 秋の俳枕を詠む
秋田・白神山地…石田冲秋　山形・最上川…鈴木正子　栃木・日光…五島高資　神奈川・鎌倉…天野小石　新潟・魚沼…安原　葉　富山・立山…中坪達哉　愛知・伊良古崎…加古宗也　奈良・春日大社…古賀しぐれ　京都・鞍馬…大森理恵　兵庫・須磨…五十嵐哲也　島根・出雲…手銭　誠　香川・小豆島…涼野海音　熊本・阿蘇…永田満徳

〈グラビア〉俳句界NOW　小河洋二

作品　豊田都峰　伊藤敬子　西山　睦

〈特集〉多様化する結社
●共同代表制　「知音」行方克巳・「小鹿」吉住達也　●ネット結社「花冠」高橋信之・「晶」長嶺千晶　●合議運営「爽樹」川口襄　●隔月刊、季刊「円座」武藤紀子・「白鳥」高松文月

おとなのエッセイ　東　直子　恩田侑布子

※セレクション結社　「青海波」船越淑子

私の一冊　上窪青樹「風嶺」

魅惑の俳人　横山房子

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　三田　完（作家）

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

自詠自読

割り落とす初日のやうな寒卵　茂登子

まだ昭和二十年代、京急川崎駅ホームの売店に藁半紙二ツ折大で二十頁程の小冊子が積んであった。野上弥生子の「山荘日記」と堀口大学の「山嶺の氣に立とう」詩であった。新聞もまだタブロイド版の頃である。活字に飢えていた折り、飛びつくようにもとめた。「山嶺の氣に立とう」とはまだ戦後の打ちひしがれていた私の心をつよくゆさぶった。野上弥生子の「山荘日記」は戦時中疎開していた軽井沢に於ける日記である。

〝朝卵を割り落としたようなきれいな日の出を見た〟と云うような一節があり、〝国破れて山河あり〟の詩の一節が脳裏に甦った。これからは、と、力づけられた二冊の本であった。

戦後アメリカから天然色映画(当時の表現)が入って来てはじめて私が見たのは「アメリカ交響楽」だったか鮮やかな色彩に感動した。

しかし、外へ出た時大きな溜息をついて空を見上げるとそこに目を見張るような夕焼けの空があった。自然てなんて美しいのだ！と思った。天然色など及びもつかない光景であった。

山荘日記の一節が思い出された。卵を割るたびに思い出されるのである。掲句はそんな下地があっての句である。

風花や中空の青小紋柄　桂子

私の住む所は西北に鈴鹿山脈が連なる地形で、冬の鈴鹿颪は冷たくて厳しく大陸からの寒気による大量の積雪をする事は希れですが、割合雪はよくちらつきます。

此の年の二月の「あを」の兼題三つの中の一つに「風花」があり、歳時記の解説を読み解いていた頃、その日は朝からひどく冷え込んだ日の昼過ぎだったと思います。西北からの風はかなり強く天から撒き散らす様に辺り一面に粉雪のようだが、雪が降るのとは少し違うような感じで、ふあふあと宙を舞い細い粒の中には大きな粒も混じり、それに太陽が反射して日本の藍色とでも言いますか、晴れ渡った空に大小一粒一粒がきらきらと輝いている美しい光景を暫し見詰めていたら、霰文様の江戸小紋の衣桁に掛けられた着物が浮かんで来ました。

「風花」この自然現象を目の当たりにし、とても懐かしく嬉しかったその時の気持が蘇りました。

蕗の薹すこし力が二の腕に　　恭　子

初めての子を湯浴みをさせる時、そばにアドバイスをしてくれる人がいない環境にあった。

その時の緊張感、心の高鳴りこのような時誰しも覚える体の震え、本当にこの前まで感じたことのない思いが足の先から頭まで電気が走るように貫いた。

お乳をあげるときは、抱きかかえているので何の心配はないが、いざお湯に入れるときの腕の力のはいりようが尋常ではなかった。終わって着るものを着せてしまった途端、ああーっとため息をついたことを今でもよく覚えている。

蕗の薹を路肩に見つけた時、興奮のあまり勢いよく摘もうとした時前述のことがなぜか頭を過った。これも何故だかわからない。そしてこの句ができた。初めての孫をだかせてもらった時も、私のかいなはパンパンに張っていた。

若布刈るひとりひとりの舟の向き　じょう
若布刈舟うねりが擡げもたげして

若布刈漁は、いわゆる伝馬船を使い、左手にあさり用の櫂（「あさり」は「いさり」と同じ意味で、方言に古語が残ったもののようです）を繰りながら右手で、鎌をとりつけた若布刈竿を、歯で噛んで固定した箱めがね越しに若布の根っこへさし込んで刈りとる。鎌の刃はその根もと辺りを引いて（潰して）おいて、その部分に刈った若布をひっかけてあげるわけです。

うねりに負けないようにしっかり箱めがねの縁を噛みますので、二時間ほど漁を続ければ歯が浮いてきて、若いうちは翌日には回復しますが、五十歳を過ぎると連日の若布刈りはつらい、ということになる。いっぽう、漁業に関しては何をやってもまことに上手にできるが、若布刈りは絶対にしない、という人があります。

前述したように、舷側から身をのり出して箱めがねを覗く。当然舟とともに人間もうねりに揺られる。そうすると、揺れているのが自分ではなく海底の岩礁である、あたかも地球が揺れている、と錯覚する。分り易く言えば船酔い。小さいうちから親に従って海上にあり、船酔いなどしたことのない人がそうなる。

箱めがね漁をしたことのあるひとなら大なり小なり、海底が揺れる、と感ずるものですが酔うとまで思う人は少ない。

そういう人は小漁師（文字通り小型の漁業、という意味です）を厭いますから、少し大きい船を買って、とどのつまりは定置網なんぞをはじめて、水産会社を起こして、と漁師として大成するに至るのです。

私の場合、潜水作業が目的で漁業権を得ましたので中途半端な漁師に終わりましたが。

箱めがね地球の揺れてゐるやうな　　じょう

遅き日の惣菜にほふ町に降り　　石動

大学入学時から結婚までの十数年を、小田急東北沢5丁目に住した。40年前の東北沢は、小さな駅。今でこそ都会的とかの隣駅・下北沢など、庶民的「市場」が存しているだけのごみごみとした町。一緒に住んでいた姉と買い物によく行った。

東北沢の駅前商店街は、降りると惣菜の匂いがプ〜ンと漂うような、それはそれは小さなもの。その惣菜の匂いが、胸をしめつける。映画「寅さん」に出てくる、ありきたりの風景のやけに懐かしく、やけに温かく、と同じである。

この句の主人公も、どこか、都会でもなく、かと言って田舎とも言えぬ、そんな駅に降り立ったのですね。店頭の惣菜から漂う匂いに、心が疼いたのでしょう。

母のやうほのと色ある藤の花　　恭子

藤の花に出会うと何故か母のことを思い出させる。何故と聞かれても確かな応えはかえせない。藤の花の咲きはじめは紫色か白かと見紛う時がある。藤棚の下に入ると気持ちが穏やかさを取り戻す。これもなぜかと聞かれても返答に困る。そういう気持になるので自分でも理解し難い。母を早くに亡くしてしまったせいかもしれない。

思い出すことは、母の良い事しか頭に残っていないようだ。最後になってしまった高校合格の報せに茶碗蒸しを（これしか記憶にない）作ってくれた晩、突如亡くなってしまった。（今にして思えば医者のミスとしかかんがえられない。）

そのせいか色のあるのか無いのかの中途半端なカラーが好きだ。あるのかないのかという中途半端な言い表ししかできない自分がもどかしいが、好きだ。

ほのといろある藤の花は、心の奥にいつまでも大事に思っている母のことだと思っている。短い十五年間であったがどうしても父より美化してしまうのかもしれない。藤の花の下に今年も立った。

縁側に大の字に寝て春惜しむ　　幸　江

小さな縁側にはお日様がたっぷりと差し込んでいる。

奥の座敷には母がお茶を飲んでいる。縁側の私には、母の漬物とお茶が出されている。「幸ちゃん」母が枕を出してくれる。何の音もせずただ晩春の陽だけが私を、私の時間をとめる。

肩先が少し冷たくなり私は目を覚ました。そろそろ家に帰ろうか、母は哀しそうな顔をして台所から今煮上がった筍を持って来た。

表で車のクラクションが鳴り呼んでいる。門灯に灯が入りタクシーのヘッドライトも点いている。気をつけてねと、と言いつつ母は私に「車代」とお金を握らせ「いらないよ」と私はいつもの通りことわったが、母は私の背中を車に押して「気を付けて」いつまでも手を振る母にこころのこしつつ。

駅に行く時間の中で私は、母の子供から、三人の子供の親の顔になった。

露天風呂ぎしりと重し菖蒲束　　東亜未

マンションに引っ越してから、小さな風呂に入るより、お風呂屋さんに行くことが楽しみになりました。港区役所に行った折、どうぞと渡された無料回数券です。お風呂屋さんは、十時半頃まで開いていて、湯船は広く、湯のマッサージもできます。露天になっている広い湯に、五月五日には菖蒲が束にされ浮いていました。持ちあげると、ズシリと思い程の束になっています。湯を吸って、湯に菖蒲の薬液を押し出している!!気持ちの良さでした。都会で菖

蒲湯に入ることができて!!感動が「ぎしり」で表現できたと思いました。

忘却などありえぬ戦火五月の夜　須磨子

空襲警報が鳴ったので外に出て見ると、杉並方面が真っ赤に燃えていました。大急ぎで身支度をして弟に、この本だけは絶対に焼かないでと頼まれていた本を木箱から掴めるだけ防空壕へ放り込み土をかけて、父の叔母である歩くのも精一杯の年寄りを妹と二人で抱えてバケツ一杯の水と薬缶一杯の水を持って前の日に焼けた杉並とは反対の明治薬科大学の方へ神田川の橋を渡って逃げました。橋の向こうから来た人たちが、こっちは火が迫ってきているから駄目だと言われて神田川の川岸の茂みの中に年寄りを座らせて氷川神社へ向って走っていると、お氷川様はもう駄目ですよと言われ今度は東中野の駅の踏切の方へ走りました。踏切の上は何人かの人が肩寄せ合っておりました。別々に逃げた父母も後から踏切へ逃げてきました。私の脳裏には三月十日の悲惨な状態がよみがえりました。夜が明け明るくなって見ると、住んでいた川添町は全滅の焼け野が原になっておりました。でも父が掘った防空壕は無事でした。冷めるのを待って開けて見ると中の布団その他の物も無事でした。

三月十日の時には道端にデパートのマネキンを裸にしたような死体でいっぱいでしたが、この日に見かけた死体は衣服がまとわりついたような死体が一体だけでした。三月の空襲で勤務先の郵便局が焼けたので其の後、私は三菱銀行東中野支店に勤務しておりました。銀行は踏切を越えたところにありましたが、焼けずに残りました。銀行の側まで逃げて行っただけなのに一旦緩急の時に銀行にかけつけたと褒められまして、金一封まで頂き面映ゆい思いをしました。しかも持って居た水は目を洗ったり嗽をしたりするのに役立ったので皆に喜ばれました。

火が落ちついて我にかえった時に、父からおばちゃんはどうしたと叱られ焼け跡を走って行って見ると、通りかかりの人が布団をかけて呉れて火傷一つしないで居てほっとしました。踏切でこれからどうしようと途方にくれて居る時、日頃出入の炭屋さんがリヤカーを持って焼け残ったから来て下さいと迎えに来て呉れました。そして一族と知り合いまで三十人以上がお世話になりました。そのうち私達家族以外はそれぞれバラックを建てたりつてを求めて出て行きましたが、私達家族は終戦までお世話になりました。そして迎えに来てくれた炭屋のおかみさんになったのが私でした。

後で知ったことですが、その家の筋向かいに喜孝さんが住んでいらしたとの事で不思議な縁みたいな気がします。芝宮の話によりますと一人身だったので逃げずに町に残って居ると喜孝さんの家の反対側の富士重工の壁に火がついたので、貯水槽の水で消化している時急に風向きが南風に変わり上ノ原の方へ火の向きが変わり宮園通り南側の一部は焼け残ったのだそうです。何がなんでも二度と戦争に巻き込まれないようにとねがうばかりです。

七月のガラス色した梓川

敏　子

山歩きを始めて四十年余り。上高地には、八回程行っている。

小学生の娘と二人、上高地より横尾迄歩き山荘に一泊して、夏休みの思い出作りをした。

五十才の夏、女性四名で上高地より四泊五日で槍・穂高縦走を計画した。二日目槍ヶ岳山荘へ着く頃には、軽い高山病で夕食も満足に食べられなかった。一晩眠ると元気を取り戻し、早朝槍ヶ岳に登り北穂高小屋へ向けて出発した。途中男性が挨拶を交わし次々と追い越して行った。飛騨泣きでは小屋が近くに見えているのに、中々進めず私達が最後の到着となった。追い越していった人達が拍手で迎えてくれ

た。小屋の方からも私達の遅々とした歩みを見ていたらしい。四日目は北穂高岳、涸沢岳、奥穂高岳と縦走し岳沢小屋へ着くと、ヘリコプターが近くを旋回していた。西穂高岳で転落事故があったと言う。同じグループの女性が悲痛な面持ちで窓から見ていた姿が忘れられない。

夫とは常念岳から蝶ケ岳へ行った。夫のスケッチに付き合いながらのんびりと山行した。下山は上高地へ長い下りだった。

梓川は何時も昔のガラスの様な色をして、さわさわと流れていた。

鳩どもとと歩く冬日のホームかな　石　動

中学一年、担任は音楽のT先生となる。当時齢40代初か？（既に寡婦）。先生は、クラス全員にノートを渡し、日記を書かせた。当時の私は我儘いっぱいの、今の私に言わせると「プチ反体制の悪ガキ」。入学早々の4月、はや国語の先生と対決し、屁理屈論に勝利し？「こんな解らない人とはもう話をしません」と授業中宣告され、英語の先生が気にくわず、彼の綽名を授業中歌い出し、往復ビンタを喰らったり。日記など書いたことも無かった私は、そんなあれこれを、ラッキ!!提出義務を果たせる……と記し、幼き弁明を縷々と綴った。

先生は、私が記した字数の数倍の量で、あれこれ書いてくれた。君は我儘。君は飽きっぽい。君は幼なすぎる。でも君はいい処もいっぱいある。君は勉強を全くしない。これからのある程度の人生を送ろうとするなら、勤しんで学べ、などなど。

予習復習などの、いわゆる「勉強経験」皆無の私は、「では、勉強とは如何にするものぞ？」と教えを乞う。驚いたであろうが先生は、丁寧に予習復習の仕方、授業中の勉強の仕方を教えてくれた。そして、私への提案。『賭けをしましょう。クラスで5番以内に入った時はマーブルチョコ一本、学年で10番以

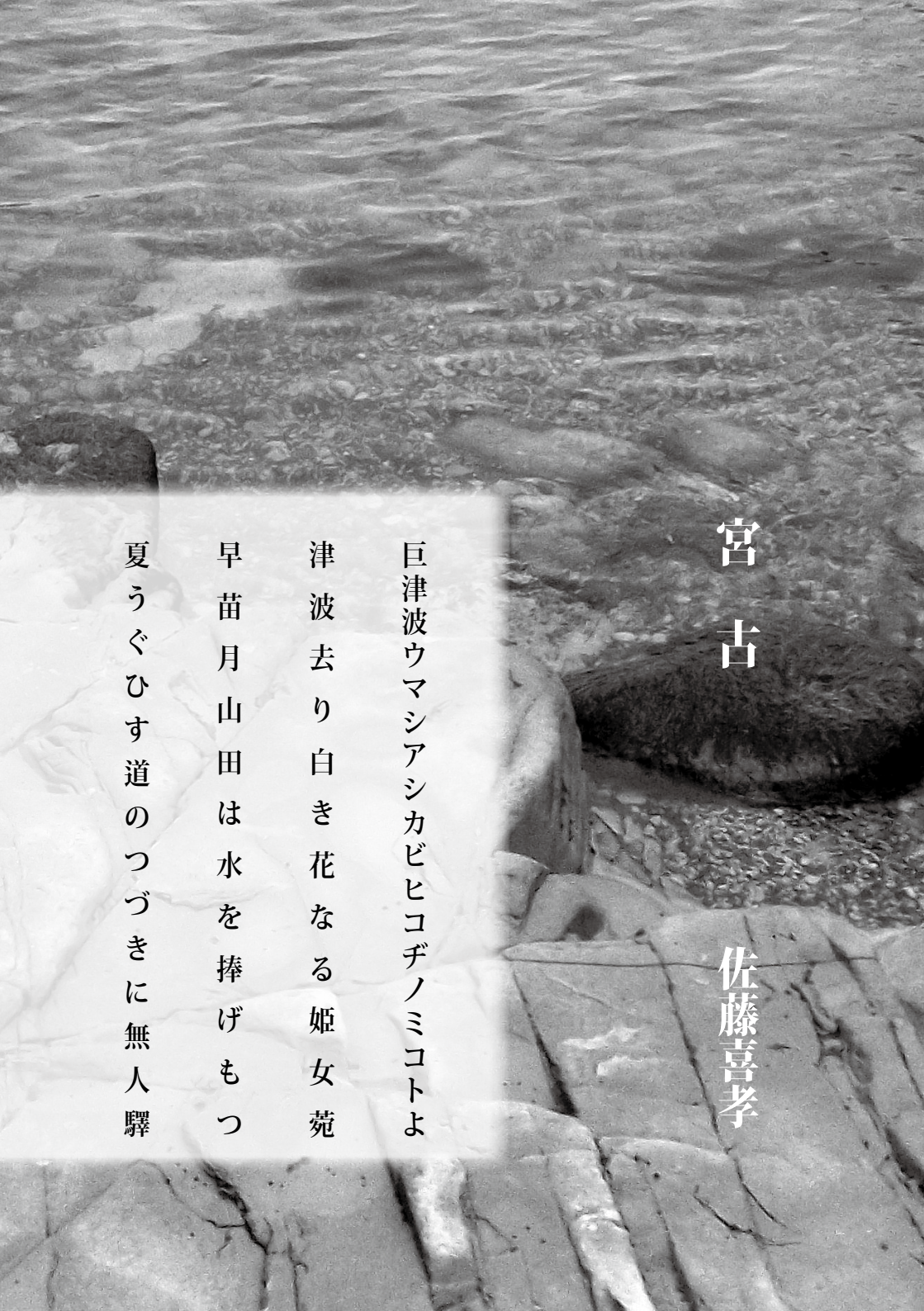
内に入った時は、もっと素敵なチョコを賭けましょう。『幼き私はゲーム感覚で、先生の期待に添うべく、「暗記専門」にて、それからの中間・期末の計6回の試験賭場をくぐった。悪運強く、先生の魂胆どおり、チョコを全て戴いた。『君が、本腰入れて学べば、もっともっと世界が広がるのに、もったいないのひとことです。』日記提出をサボると、何でもいいから書いて出せ！継続こそ重要！　平凡な一日を記して、これほど読ませる……とは、なかなか佳！車を買ったから載せてあげる！　君、この天候のことを「ナタネヅユ」と言うのよ……などなど。13歳の少年は、この先生から、人間とは、生きるとは、学ぶとは、礼儀とは……数々を学んだ。

結婚報告に訪れた時は、隠棲の地にひとりで住まいしていた。お互いの住地が離れての、賀状付きあい程度のある年、賀状が来ず、遅れて「喪中につき」の葉書。電話に出た一人息子に先生の墓を尋ねた。が、そのメモを紛失し、そのまま時が過ぎた一昨年、嫁（中・高と、私の同級生も、一度も同クラスにならず。）と連絡が取れ、教えて貰った墓所へ甲府駅経由で訪ねたのは師走。「先生、長い間ほったらかしでゴメンね。やつと墓参りできたよ。缶ビール一緒に飲もうね」。南アルプスに傾き始めた冬日の中、あれこれ話をした。

掲句は、その往路、甲府駅で乗り継ぎ待ちをしていた時のひとこま。

付け足り

文を綴れ、の教えは確実に私の中に生き、連日の手紙攻勢の末、今のカミサンを獲得。が、これが成果・成功と言えたかどうか……は……



宮古

佐藤喜孝

巨津波ウマシアシカビヒコヂノミコトよ

津波去り白き花なる姫女菀

早苗月山田は水を捧げもつ

夏うぐひす道のつづきに無人驛

梅天を肩に羽織りて山明くる

木天蓼やうしろの山はすぐにじむ

やませくる目の端紅き海の鳥

巌松をやませのはしり海猫しづか

海猫の飛びてやませは空深め

バス停にバスは來るはづ草刈跡

夏野原ここに分れて徑と路

あとがき

今月は遅刊になってしまった。御寛恕を。

「自詠自読」での芝宮須磨子さんの文を読んだ。須磨子さんが戦火を逃げてゐたときわたしは指を折れば四歳になったばかり。母は背中に弟をくくりつけ須磨子さんと反対の中野駅方向へ逃げた。父やおじさんは須磨子さんと同じく東中野駅方面へ逃げたさうだ。ゝ母はすぐに行く手が火の海で行くも退くもならず下駄屋さんの軒先を借りて朝までゐたやうだ。須磨子さんは防空壕の熱が冷めてから開いたが、親は早くに開け燃えてしまひ無一物になったさうだ。〈やうだ〉〈さうだ〉と書いてゐるのはわたしの記憶にはないこと、後日親や叔父叔母の話を繋ぎあはせてのことである。『最初の記憶』に短文ではあるが書いてある。

須磨子さんのご主人とは一度もお目にかからなかった。須磨子さんのお店で飲食をしてゐたとき、襖一枚向こうにをられたと聞いた。会っていろいろお話をお聞きしたかったと、残念でならないが、今回の須磨子さんの文で、その渇を癒すことができた。

じょうさんの若布刈りの話など知らない世界なので身を乗出して読ませていただいた。『自詠自読』はおもしろい。遠慮せずにどんどん書いてください。投稿順に掲載できないときもありますのでその時はよろしく。

二〇一四年九月号

発行日　九月十六日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。